蝶ヶ岳・大滝山・鍋冠山　　毎日新聞旅行　　4～5 日

蝶ヶ岳へはこれで５回目くらいになるが、すべて上高地絡みであった。安曇野側から登って、同じ方向に降りるというのでエントリーした。結構きつくなることを予想していたが、こういった心構えの時は案外結果はいいものである。このところの俺の山登りのお定まりになってしまった“天気予報は大雨”である。そしていつもと同じように雨にこそなったが、それが原因で歩きにくいというほどのこともなかった。ツアーコンダクターは佐渡に続いてイラストレーターの酒井さんだ。それに戸村のオバさんも付いた。以前は借りてきた猫みたいにおとなしかったが、今では大声を張り上げてガイドの伝達を行う張り切りバアさんに成長した。ガイドは有明山案内人組合の長老格の下條さんである。

大滝山南峰

ゴジラみたいな木

ゴジラみたいな木などという、思わず微笑みが出るようなものもあった。道は、北アルプスにしては珍しく傾斜が緩めにつけられており歩きやすい。とはいえ 1400m の標高差を埋めなければいけないのであるから楽なところばかりというわけにはいかない。下條さんの適切なリードでなんとか付

蝶ヶ岳小屋

いていける。この日の体調は、傾斜がきつい時にはそれなりにバテたが、最後の方で傾斜がゆるくなった時には体調も回復していた。近頃としては珍しいことだ。蝶ヶ岳小屋は、内部は意外に広くて過ごしやすい小屋である。今までは通り過ぎるだけで気にも止めていなかったが、さすが北アルプスだ。毎日新聞旅行からは軽アイゼン持参の指示があったが、ガイドの判断によって使用しないことになった。まあたまに雪の上を歩くこともあったがアイゼンの必要性まではなかった。

夜中３時頃には、小屋の屋根を激しく叩く雨風の音に恐ろしさを感じたが、出発の頃にはだいぶ収まって前日同様に歩くのに支障があるほどではなくなった。この山の特徴は、槍穂の景観と高山植物ということであったが、景観を希む天気ではなかったし、高山植物もごくごく地味であった。まあキヌガサソウの全開したのくらいが見所であった程度か。こんな感想しか持たないようだからちっとも高山植物のことを覚えられない。大滝山も地味な山であり、それがこの山らしくって好感が持てるという、そんな山があったっていい。

キヌガサソウ